

平成 29 年度 学校と地域をつなぐコーディネーター等養成研修会 事業報告書

本研修会は、各地域において、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動を推進するコーディネーターの養成と地域連携を担当する教職員の資質向上を図ることを目的として、道内の4会場で開催しました。

- | | |
|---|---|
| 【道南】 ■ 日 時：平成29年7月6日（木）
■ 会 場：だて歴史の杜カルチャーセンター
■ 参加者：69名 | 【道東】 ■ 日 時：平成29年7月11日（火）
■ 会 場：釧路町公民館
■ 参加者：85名 |
| 【道央】 ■ 日 時：平成29年7月20日（木）
■ 会 場：北海道第二水産ビル
■ 参加者：37名 | 【道北】 ■ 日 時：平成29年9月5日（火）
■ 会 場：上川合同庁舎
■ 参加者：51名 |

【日程・内容】

10:00	11:00	12:30	13:30	15:00	15:30
受付	開 会 講義	パネルディスカッション	昼食	演習	まとめ 閉 会

1 講 義 「これからの学校と地域の連携とコーディネーターの役割」

【道南・道東・道北】北海道教育庁学校教育局義務教育課子ども地域支援グループ主査 石田 貴 宏

- 平成27年12月の中央教育審議会答申では、「地域学校協働本部」を全ての地域に整備すること、地域全体で学び合い、未来を担う子どもたちの成長を支える「地域学校協働活動」を推進することなどが提言されており、これまでの学校を支援する活動から発展させ、地域と学校が連携・協働し、互いに意見を出し合い、学び合う中で地域の将来を担う人材の育成を図ることが求められている。
- 次期学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが示されており、地域の人材や物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ることが重要である。
- そのため、地域学校協働本部でコーディネーターの役割を果たす「地域学校協働活動推進員」の配置と、地域との連携・協働を担当する教職員（「地域連携担当教職員」）の位置付けなど、地域と学校との連携協力体制の整備が非常に重要である。

【道央】全国体験活動ボランティア活動総合推進センターコーディネーター 橋本 洋光 氏

- 平成27年12月の中央教育審議会答申において、学校と地域の関係が「支援」から「連携・協働」へと転換が図られた。「地域とともにある学校」とは、「学校は地域のものである」という捉え方であり、学校を核とした地域づくりの推進が求められている。
- 学校と地域の連携・協働の実現に向け、上からの指示ではなく、下からの議論の積み重ねである熟議により、理念・ビジョンを共有することが重要である。
- コーディネーターは、違う立場の人達をつなげていく役割を果たす。学校サイドのコーディネーターが「地域連携担当教職員」、地域サイドのコーディネーターが「地域学校協働活動推進員」という位置付けであり、両者がそれぞれのニーズを把握し、マッチングしていくことが基本的な流れとなる。
- コーディネーションの手順としては、学校のニーズを「集める」、その情報を地域ボランティアに「知らせる」、学校やボランティアが何故そのニーズをもつのかを「受け止める」、プログラムを「拓く」、支援を求める人とボランティアを「結ぶ」（マッチング）、活動を「ケアする」（振り返り）、改善点を踏まえて次のプログラムを「創る」が一般的であるが、これらを地域の状況に合わせて実施することが重要になる。
- 地域から学校への支援のみに留まらず、子どもたちが地域住民と共に地域の課題を解決する学習プログラム等を開発することが「協働」であり、このことが「社会に開かれた教育課程」の実現につながる。



2 パネルディスカッション・演習

(1) パネルディスカッション

伊達市教育委員会教育部参与

櫻井 貴志 氏

- ・コミュニティ・スクールは、地域住民等が学校運営に参画し、学校を応援する仕組みである。あくまでもツールであり、設置が目的ではない。活用の仕方によって、保護者の苦情が少なくなる、学力が上がる、いじめや不登校等の生徒指導上の問題が少なくなる効果がある。
- ・コーディネーターが、その役割を大きな負担に感じると継続した活動をするのが難しくなる。そのため、既存の学校支援の取組等を生かして、それぞれの学校や地域の状況に合わせて無理なくできることから始め、その取組を継続・充実させていくことが重要になる。



洞爺湖町教育委員会教育指導専門委員

加賀谷 真由美 氏

- ・教育指導専門委員として、コミュニティ・スクールの設置、学校支援地域本部事業の推進、地域未来塾の運営、不登校対策、読書活動の推進等に関わっている。
- ・地域未来塾では、地域ボランティアや学校等の協力を得て、児童生徒の学習意欲の向上、体験活動や交流機会の提供を行うことができた。取組を通して、地域と学校、教育委員会の連携・協働が進んだことも成果と言える。課題としては、学校の希望に合うボランティアの確保が難しいこと、ボランティアの高齢化があげられる。担い手の確保と養成が求められている。



壮瞥町立久保内小学校地域連携担当教諭

小島 充雄 氏

- ・「地域の子は地域で育てる」をコンセプトに、PTAに地域住民や企業、団体を加えた「丘の子応援団（久保内小PTCA）」を設立した。地域の人的・物的資源の活用や、学校教育と社会教育の連携によって社会に開かれた学校を目指している。
- ・地域連携担当教諭として、地域住民による学校支援活動、放課後の教育活動、地域伝統文化活動等を行う際の企画や調整を行っている。今後、学校を核として地域の大人と子どもが学び合う活動を充実させ、地域コミュニティを活性化させる動きにつなげていきたい。



(2) 演習

進行 北海道立生涯学習推進センター主査

尾山 清龍

「コーディネートの技法」について演習を実施した。職場体験学習をテーマに学校・コーディネーター・教育委員会がどのような役割を果たすべきか、グループに分かれて意見交換を行った。参加者からは、「様々な立場からの話が聞けて良かった。学校を地域が支える仕組みを考える機会になり、有意義なものになった」等の感想が出された。



(1) パネルディスカッション

上士幌町教育委員会社会教育推進員

橋 大介 氏

- ・上士幌町では、「かみしほろ学園構想」として「幼児から高校生まで一貫性のある教育づくり」「地域総ぐるみで子どもたちの育ちに関わる仕組みづくり」の基本理念のもと具体的な施策を展開している。
- ・コーディネーターは、学校と地域の皆さんの話をよく聞き、橋渡しをするのが役割である。様々な事案のコーディネートを行うにあたり、学校と地域の相互理解が不可欠であり、様々な意見を出し合い、熟議することがとても重要である。



釧路市教育委員会地域学校協働本部統括コーディネーター

日野 登 氏

- ・釧路市では、コミュニティ・スクール指定校を対象に「地域コーディネーター」を配置し、「統括コーディネーター」とともに学校支援ボランティア、教育支援ボランティアの活動を推進している。
- ・地域コーディネーターは、各学校における学校支援活動の調整や広報活動等、学校・地域・保護者のつなぎ役として活動している。統括コーディネーターとして、コーディネーター間の円滑な連絡調整や研修会等の機会の充実、情報共有を大切にしている。



中標津町立中標津小学校校長

横山 裕充 氏

- ・本町では、コミュニティ・スクールの導入に向け、先進地である三鷹市や武蔵村山市を視察し、コミュニティ・スクールや小中一貫教育の取組を学び、本町での取組の参考としている。
- ・学校運営協議会委員の人選は重要であり、まちの将来のことを真剣に考えている人、やる気をもった人を中心に人選し、「やれることから」「確実に継続的に」取り組みを始めている。また、本町では、中学校区単位ではなく、各学校区単位で実施することにより、地域が近いというメリットを生かし、地域と学校が協働しているという実感が得られよう工夫している。



(2) 演習

進行 北海道生涯学習推進センター主査

尾山 清龍 氏

「コーディネーターの機能と技法」と題して、地域資源の発掘や地域ネットワークの構築・維持の重要性について説明した後、「職場体験を学校の年間指導計画に位置づけ、実施するまでの調整内容を考える」をテーマに、学校、コーディネーター、市町村教育委員会などのそれぞれの役割と調整内容を考えるグループワークを行い、コーディネーターの役割や必要性等について理解を深めた。

道央ブロック

(1) パネルディスカッション

寿都町教育委員会教育次長

木村 豊 氏

- ・本町では、町内の3つの小・中学校に学校運営協議会を設置するとともに、学校運営協議会連絡会を設置し、3つの協議会の情報交流、共通課題の解決、方策の検討の場としている。
- ・首長部局と連携し、町の正職員として1名のコーディネーターを配置し、ボランティアの確保、メニューバンクの作成、マッチングなど、学校と地域をつなぐ役割を担うとともに、地域住民に向けて「コミュニティ・スクールだより」を発行し、各学校における地域と連携した活動の様子を紹介している。



寿都町立寿都小学校長

新井 融 氏

- ・本校では、読み聞かせ、ミシンの授業、水泳・スキー学習、ソーラン節・和太鼓の指導、漁業体験等、様々な教育活動において、地域の教育資源を活用している。
- ・ボランティアの活用により、学習の多様化、教職員の負担軽減、児童生徒の郷土愛の育成のほか、地域住民の生きがいにもつながっている等の成果が得られている。
- ・今後、学校づくりと町づくりの双方を意識した教育課程を編成することが重要であり、コーディネーターは「社会に開かれた教育課程」実現の重要な役割を担っている。



栗山町教育委員会指導主事（コーディネーター）

大津 外志男 氏

- ・本町では、町内4つ小・中学校に学校運営協議会を設置するとともに、地域教育の在り方や学校支援を協議する「地域教育協議会」を組織し、校区単位のワーキンググループが学校支援の調整役を担うことにより、コーディネート機能をもたせている。
- ・学校支援により、子どもたちが「ふるさと栗山」に学ぶことに自信と誇りをもつ、地域の人達が学校支援を通して生きがいを感じる、こうした双方にメリットがある学校支援を実現することがコーディネーターの大切な役割であると考えている。



(2) 演習

進行 全国体験活動ボランティア活動総合推進センターコーディネーター

橋本 洋光 氏

「多様な主体との連携・協働に関する知識・技術」をテーマとして演習を実施した。各グループにおいて、「学校と関係機関が活動の目的を共有する機会を設定する」ことや「計画的な人材の育成と発掘する」こと、「教職員に学校支援ボランティアの活動を周知する」ことなど、関係機関との連携・協働を実現するために必要な手立てについて、熱心に協議が行われた。



道北ブロック

(1) パネルディスカッション

浦幌町教育委員会教育次長

佐藤 亘 氏

- ・浦幌町では、町内の全小中学校でコミュニティ・スクールを導入しており、浦幌地区と上浦幌地区のそれぞれに小中一貫CS委員会（学校運営協議会）を設置し、小中一貫教育とコミュニティ・スクールを一体的に取り組んでいる。
- ・学園構想を取り入れ、地域の主体性を生かすとともに、家庭や地域が中心の「小中一貫CS委員会」と教職員が中心の「小中一貫CS推進協議会」を生かした組織づくりを行っている。
- ・小中一貫CSを導入したことにより、学校・家庭・地域間及び首長部局・教育委員会の協働体制が生まれるとともに、学校に対する理解が深まり、学校や地域の人たちが元気になっている。また、子どもたちは、地域の魅力に触れることで、地域への愛着や誇りが芽生え、ふるさと意識が育まれている。



浦幌町立浦幌小学校教頭

白井 将之 氏

- ・地域連携担当教職員をコミュニティ・スクール担当として校内体制に位置づけ、教職員の加配や補助事業を受けなくてもコミュニティ・スクールができる持続可能な体制をつくっている。
- ・地域連携担当教職員は、校内の連絡調整や地域との具体的な打合せ、事業後の記録の整理等を行っており、担任と地域をつなぐ働きをしている。
- ・コミュニティ・スクールを進めるにあたって、負担感が出てくるのはやむを得ないが、地域の方と一緒に活動することにより、子どもの様子や学びに変化が見られたり、教職員の指導力の向上につながったりしているので、教職員は充実感を感じていることが多い。



(2) 演習

進行 北海道生涯学習推進センター主査

尾山 清龍 氏

コーディネートの機能や技法のショートレクチャー後、「職場体験を学校の年間指導計画に位置づけ、実施するまでの調整内容を考える」をテーマに、学校、コーディネーター、市町村教育委員会などのそれぞれの役割と調整内容を考えるグループワークを行い、コーディネーターの役割や必要性等について理解を深めた。参加者からは、「コーディネーターの必要性、有用性を実感することができた。」「他の立場の人との意見交換は大変参考になった。」等の感想が出された。



道南ブロック

3 参加者の声

- 実際に実践されている取組の話を書くことで自市で取り組む内容を考えることができた。
- 具体的な話を聞くことができて大変参考になった。特に、「できるところからやる」、「学校の立場を理解する」という点が参考となった。
- コーディネーターの重要性が理解できた。実施可能な取組から手がけるということを中心に心がけたい。
- 学校支援ボランティアの大切さを再確認した。学校支援ボランティアのネットワークが重要である。
- 地域に合った学校とのつながりや在り方があって良いと感じた。
 - 学校の負担が改めて多いと実感した。やれることをやれる範囲で実施していきたい。
 - コーディネーター等の人材の確保が課題である。人材の発掘と育成が重要と感じた。
 - コーディネーターに過度の負担をかけないことが大切と感じた。複数のコーディネーターの配置が重要である。



道東ブロック

- 地域の実態や課題に根ざした制度活用を行うことの重要性について理解できた。
- 学校の「困り感」をリストアップし、地域と協議しながら解決策を考えていくという方法が参考となった。
- 様々な規模の市町村での実践例から、CSや学校支援の今後の方向性が理解できた。
- コーディネーターの役割が重要と感じた。コーディネーターの存在が学校の負担減につながることを実感できた。
- これまでの活動の成果と課題を踏まえ、どのように連携・協働すべきか考えていきたい。
- 関係者が目標を共有するため、協議の機会をつくり、活動を充実させていくことが大切であることを理解した。
 - コーディネーターの身分的保障など、配置する際の話をもっと聞きたかった。
 - 現実問題として、コーディネーターの確保はボランティアだけでは難しいと感じた。



道央ブロック

- 実際にコーディネーターからの話を聞き、コーディネーターの必要性が大きいと感じた。
- ボランティアの共有部屋を作るというアイデアは、すぐに使わせていただこうと思った。「学校支援の方が増えると、それはセキュリティになる。」という言葉が印象に残った。
- 具体的な実践や、ボランティアの登録シートなどをみることで、より具体的なイメージができた。
- 具体的な導入事例を参考にし、メリット・デメリットを明らかにしていきたい。それぞれの自治体が抱えている課題を中心に今後、研修を行いたい。
 - 行政、学校、地域での共通理解が不足している。教育委員会だけではなく、市役所や他の機関との連携が必要である。
 - CSや学校支援に取り組む上で、人材が不足している
 - 学校のニーズが多様化してきており、それに伴うボランティアの確保が難しくなっている。



道北ブロック

- コミュニティ・スクールの役割、コーディネーターの実態等が分かり、理解が深まった。
- 現場で実際にコミュニティ・スクール立ち上げに関わった方からの説明を聞いて、不安が解消された。
- その地域や学校の現状にあわせたコミュニティ・スクールの推進など、コミュニティ・スクール導入に向けた具体的な進め方や組織マネジメントについて理解を深めることができた。
- 町教委と学校、それぞれの立場、取組が聞けて、連携の在り方の理解につながった。
- コーディネーターの必要性、有用性を十分理解することができた。
 - 活動事例におけるコーディネーターの役割について、もう少し触れてほしかった。
 - パネルディスカッションでは、もう少し現場の実際について聞きたかった。
 - コーディネーターをしてくれる人材確保が難しいのではないかと感じた。

